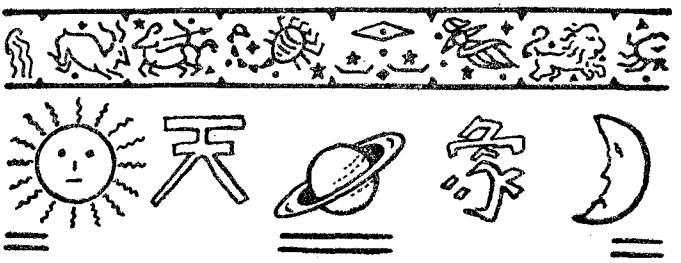
一九三五年（昭和十年）



三月（花山天文臺）

I——太陽と月（天空の明暗）

日付	日出		（星座）	日没	
日	時	分		時	分
1	6	28	（みづかめ）	17	35
6	6	21	〃	17	57
11	6	14	〃	18	1
16	6	7	（う　を）	18	5
21	6	0	〃	18	9
26	6	53	〃	18	13
翌3	6	46	〃	18	17

日付	夜半の月齢	月出		（星座）	月没	
日	日	時	分		時	分
1	25.3	3	23	（い　て）	13	17
2	26.3	4	9	〃	14	30
3	27.3	4	52	（や　ぎ）	15	45
4	28.3	5	28	〃	17	0
5	29.3	6	5	（みづかめ）	18	13
6	0.9	6	37	（う　を）	19	25
7	1.9	7	10	〃	20	36
8	2.9	7	45	〃	21	47
9	3.9	8	23	（ひ　つ　じ）	22	55
10	4.9	9	6	〃	——	
11	5.9	9	55	（う　し）	0	4
12	6.9	10	42	〃	1	1
13	7.9	11	39	（ふ　た　ご）	1	54
14	8.9	12	35	〃	2	39
15	9.9	13	34	（か　に）	3	16
16	10.9	14	13	〃	3	53
17	11.9	15	28	（し　ゝ）	4	22
18	12.9	16	23	〃	4	48
19	13.9	17	20	〃	5	12
20	14.9	18	16	〃	5	37
21	15.9	19	14	（を　と　め）	6	3
22	16.9	20	14	〃	6	31
23	17.9	21	16	〃	7	2
24	18.9	22	19	〃	7	35
25	19.9	23	20	〃	8	17
26	20.9	——		（さ　そ　り）	9	5
27	21.9	0	17	（へびつかひ）	10	0
28	22.9	1	11	（い　て）	11	4
29	23.9	2	7	〃	12	13
30	24.9	2	48	（や　ぎ）	13	23
31	25.9	3	26	（みづかめ）	14	35

II——天象

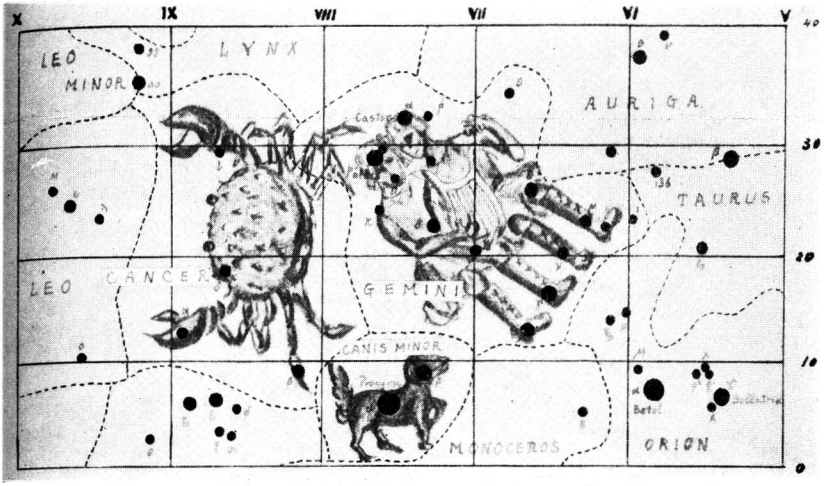
日	時	分	
1	19	—	水星が停留
3	20	41	水(南6′)と月と合
4	20	13	土(南4°32′)と月と合
5	2	—	海王星が對衝
7	11	41	火(南6°13′)と月と合
8	16	40	天(南6°3′)と月と合
10	17	—	木星が停留
11	3	—	水星が降交點
16	4	—	水星最大離角(西27°37′)
19	10	37	海(北4°58′)と月と合
21	9	—	水星が遠日點
21	**22**	**18**	**春分**
22	16	—	金(北24′)と天と合
22	17	9	火(北8°35′)と月と合
22	18	—	水(南19′)と土と合
25	2	6	木(北5°59′)と月と合
25	4	—	金星が昇交點
26	**4**	—	**Antares が掩蔽**

新　月	3月 5日11時40分	**滿　月**	3月20日14時31分
上　弦	12日 9時30分	**下　弦**	28日 5時51分

主な流星群

日付	赤經	赤緯	附近の星	性質
1日——4日	166°	＋ 5°	獅子座 χ	緩
15日頃	250	＋54	龍　座 η	速
18日頃	316	＋78	セフエ座 β	緩

—— 三月の星座 ——「双心始末」



同じジユピタ1の白鳥の卵より生れ出て以來 初めて其の戰に二人は別れたのです.

カスタ1にしてもポラツクスにしてもホンのしばしの 別れだと思つて居たのです.

曉の靜かなる散光の中に二人は其日の敵を降すべく 別れて行きました. ……また會ふ日迄の……それだのにお互ひの 微笑が永遠に絶ち切られたのです……かのとき, ……

アイダスの投げ槍はカスタ1の胸を貫いて ポラツクスを悲哀の中に打ちのめしたのです. ポラツクスは今は主なき白馬ケルリスと供に自分の愛馬をも放つのでした. ……なき人を思ひ起こさせる數々のものを.

海上に時としてゆらぐ「セント・エルモの火」も今は絶え絶えに 青白く打ち沈み……そしてポラツクスの劍はヴアルカンの 雷電の如く尖鋭に磨ぎすまされるのでした. 其の燐光を放つ刄先は永遠にアイダスの胸に凝せられて居なければならないのです.

されど報復成つて此の英雄の胸に何が殘されたでせうか.

地上の因果終れば以前に增して沼の様な憂愁が ポラツクスの心身に滲透するのです.

供にアルゴ1號遠征にたづさはつた 幾夜を思ひ起すのでした. ……オルフユ1スの竪琴に和して歌つた星月夜……

天と地の距離の間に彼の悲歎は己が生をさへも怨むのでした.

今は父なるヂユピ1にカスタ1の身代りを絶叫するポラツクスでした. 同時に生を與へられて今は堪え得ぬ愛別死別. 叶はざれば一日を供に暮し明くる一日を天と地に引きさかるとも.

二つが連れて夜語る一つ…… 愛着の互ひに引き合ふところ死別を越えて結ばれる宇宙の法則が なければならないのです. ……他あるが故に一つは保たれ……これあるが故に引かるゝ思ひの他.

春の朧夜ヂユピタ1は此の讃づべき兄弟愛をソツト星座に招くのでした.